論説

古代東北における律令国家の漸移地帯

山 田 安 彦

序—基本的視角と目的

時間も空間も人間の属性であるから、人間の関與した生産空間の発展過程、その変遷の速度、およびその要因を把握しなければ、現在の生産空間の構造を理解しきないと筆者は考える。しかし、それには、生産空間の歴史的現象の年代的序列を整理するだけではなくて、人間の個および集団がそれぞれに関與している地域構成要素の結合組織の成立展進の過程、および地域と地域の組合せの地域体系に関する変遷過程を明白にする必要がある。この視点に立つと、地域変遷とその要因の把握が、新しい空間秩序の地域を創造する基礎となる。

すなわち、歴史的観点に立つ地域変遷の法則性の追究ではなく、地理学的観点に立脚する地域変遷の法則性の追究が、歴史地理学の重要な課題であり、また、そこに学の現代的意義が存在する。

かかる観点から、筆者の次の意図が生まれた。文化の内部からの次元的変化によって変容する、いわゆる文化変化によって、地域構造と地域体系が変貌するのを究明するだけでなく、文化の接触変化による地域の変遷を把握したいのである。換言すれば、文化変容による地域変容だけでなく、文化の伝播や文化的接触変化によって、生産と生活の組織に変化が生じ、地域構造と地域体系が変容する過程を究明するのが本稿の主眼である。

具体的には、わが国における律令的デスポティズムと蝦夷との接触変化による地域構造の推移を、本稿で取扱うことにする。律令国家が確立するに従い、国家財政の増強のため、領土統一と居住地域の拡大をはかる。そのために、国家の勢威を背景にした国家としての開拓を前進させる必要がある。勿論、律令時代前代においても、弥生式文化や古墳文化が伝播している。律令的デスポティズムが東北日本に波及する場合、如何なる地域形成の過程を経て、国家領域体系のなかへ、蝦夷の開拓地が編入されるか。また、律令的組織の地域秩序に

1）山田安彦：歴史地理学における生態学と地域体系、岩手大学教育学部研究年報、26巻、1966、
p. 69〜85.
移行するまでの地域構造，および地域体系の推移を究明するのが本稿の目的である。

換言すれば，律令的体制を背景にした国家的開拓が，東北日本に浸透する際，律令国家体制内の人間が関与した地域，と，蝦夷が関与した地域との如何なる関連のもとに，律令国家体制の地域体系のなかに秩序化されるかについて追究したいのである。このことについては，かって筆者が，予察的に究明を試みた。

本稿は，それらの研究と同じ流れのなかにある。

本論を展開する前に，古代東北日本の歴史地的研究を進める上で，大きな課題となっているものを，筆者なりに，その課題の意義について述べ，論究の方法を考えることにする。

1 古代東北日本に関する研究上の特殊性と課題

本稿の目的に接近するには，容易なことではないことを承知している。従前の古代東北日本の歴史地理研究における接近方法が安定していない重要なる要因には，2，3 考えられるが，就中，蝦夷の実態が不詳であるということと，歴史地理的追究の資料の存在が稀薄であるということである。そこで，それらの問題の所在を追究しながら，その接近方法を考察してみよう。

（1）蝦夷研究の課題

蝦夷については，その実態が詳細に知られていない。しかし，蝦夷に関する論稿は決して少数ではないといえないうちが，そのなかで西村真次や長谷部言人等は人類学的に，斎藤忠と伊東信雄等は考古学の観点から，津田左右吉・坂本太郎・田名網宏等は歴史学の立場から，精緻な分析による詳細な記記批判に基づく論説がある。近年では高橋富雄等，先学の研究成果や従前の発掘結果を集大成し，蝦夷研究を前進させている。古代史談話会は，歴史学からの古文献批判と考古学からの発掘調査による解釈と

2） 山田安彦：先・原史遺跡よりみた東北の地域構造，立命館文学，153号，1958，p. 63～80。

3） 山田安彦：東北日本における律令国家の浸移地帯一地域構造の推移に関する歴史地理学的研究試論，立命館文学，169号，1959，p. 51～66。

4） 西村真次：日本古代史上的諸種族（雄山閣編：人類学史学講座11巻，1941，所収）p. 1～26。

5） 長谷部信人：蝦夷（日本人類学会編：日本民族，1952，所収）p. 130～145。

6） 斎藤忠：北日本の古代文化一歴史学と考古学との関連性に関する問題，古代学 2，1958，p. 94～107。

7） 伊東信雄：考古学上から見た東北古代文化（古田良一博士還暦記念会豊田武編：東北史の新研究，1955，文理図書，所収）p. 1～30。

8） 津田左右吉・日本古典の研究 上，1948，岩波書店。

9） 坂本太郎：日本書紀と蝦夷（古代史談話会編：蝦夷一古代史研究 第2集，1956，岩波書店，所収）p. 56～91。

10） 田名網宏：古代蝦夷とアイヌ（古代史談話会編：蝦夷 前編）p. 1～55。

11） 高橋富雄：蝦夷，1963，吉川弘文館。

12） 古代史談話会編：蝦夷一古代史研究 第2集，1956，岩波書店。
を併せて、蝦夷研究を集大成しているのである。それらの従前の蝦夷研究に関する論稿は既大な量であり、且つ精緻な論究であるから、要約することは、論意を充分に表現し尽くし得ないので危険であるが、敢えて筆者なりに整理することにしよう。

従前の蝦夷研究を基にして、筆者が蝦夷を想定すると、蝦夷は異民族ではなく、畿内からみて遠隔地に住み、しかもそのが辺境地帯にあたるため、畿内では人々の意識のなかで異民族的に想定化され、畿内政府によって異民族扱いされるようになってしまったのである。しかし、畿内側の住民が、東北日本の「蝦夷地」の住民と接触することに、徐々にではあるが、その異民族化した想定は、解消されたのであると筆者は考える。今日まだ依然として、蝦夷の概念は明確ではないが、筆者は蝦夷そのものを探求しようとするのではなくて、いわゆる「蝦夷地」の在来からの住民が関興していた土地が、如何なる過程を経て、律令国家体制の中へ編入され、そして「蝦夷」および「蝦夷地」という事実を解消して、律令体制内へ同化し、内民化したかということを探求することによって、蝦夷を解明する端緒を見出すことになると考えるのである。すなわち、東北日本における律令国家の移地帯の地域現象を通じて、「蝦夷地」が律令国家の体制内に、地域体系を編成して行く過程を分析して、「蝦夷」と「蝦夷地」というものを把握しようとするのである。この点が、従前の歴史学や歴史地理学における東北研究とは大きく異なる観点といえる。

蝦夷を異民族扱いするようになったのは、華夷思想（中華思想）によるものであろう。この時すでに、わが国には中国の夷狄観が浸透していた。中国人が夷狄を軽視したのは、人種的差別よりも文化的水準の相違による場合が多かった。夷狄の文化階梯が低位の間は、中国人により、夷狄は排斥されがたが、夷狄の文化が中国文化的水準に到達する位に、進歩したり、同化されてくると、中国人は夷狄を差別扱いしなくなった。このことは律令政府が蝦夷を所遇する状態と類似するのである。

要するに、わが国において文化が集積し、歴史上中核存在であった畿内という「極」から、文化的伝播および律令国家体制の確立と拡張というエネルギーをもって周辺外延部に波及する際、非畿内のエネルギー＝東北日本の「蝦夷地」という「極」からのエネルギーと接触する地帯を、律令国家と蝦夷地と

12) 田名網宏；古代蝦夷とアイヌ（前掲）p. 17 〜27。
高橋富雄；蝦夷（前掲）p. 9〜50。
13) 森三樹三郎；華夷思想（平凡社；世界大百科辞典 4 巻，1968，所収）p. 4.
の漂移地帯と呼称する。以下、この地帯を律令国家の漂移地帯と略することにする。この地帯で両者の抵抗現象が起こるが、律令的デスポチズムに支配され、その体制内に編入され、また畿内文化に同化され、畿内政府の地方行政組織内に編入される過程を通じて、蝦夷という事実が解消して行く経緯をおらかから、東北日本「蝦夷地」を理解しようと考えるのである。

（2）古代東北日本における開拓遺跡研究の課題　古代の東北日本に、広大な水田面積が存在したことは『倭名類聚抄』その他によっても明確である。この大規模性が東北日本の魅力であり、早くから大和朝廷が東北に着眼したことは、『日本書紀』に現われており、律令国家が積極的に、東北経営を推進したこととは、『続日本紀』や他の六国史により把握しろう。律令国家の東北開発は、律令国家確立と拡充のための財政増強にある。しかし、蝦夷との接触抵抗という特殊性が存在する。そこに、如何なる地域構造が構成されたかが、われられには重大な課題がある。そのためには、先ず、律令体制の進展過程を明確にしなければならない。その律令的デスポチズムの基礎的類型は条里地割である。そこで、筆者は、律令国家漂移地帯における条里地割分布を検出しているが、まだ完成していない。近い将来に、その様相を論じたい。目下のところ、条里遺構は局地的に、しかも断片的にしか残存しないのである。その他、律令的体制を基礎にした遺跡＝城柵遺跡＝柵戸集落、その他関係遺跡＝古代寺院址＝古代瓦窯跡なども明確に全貌が把握されているものは少ない。考古学的に発掘調査された遺跡で、内容を精緻に分析されているものは、まだ少ないのである。遺跡として確認されているものを取挙げても、地域的にみれば、それは点的存在であり、その内容によって面的な解釈は容易ではない。従って、地域構造論にまで発展させるには、関係遺跡相互の関係と、加えて古文献の記載内容と

14）板橋敏：『東北古代頭興』岩手史学研究14号、1953、p.12。恒藤規隆測定による各国沿岸の傾斜15°以下の平地面積の一覧表が掲載されている。—応、水田適地の面積が存在したことが推察される。
15）京都大学文学部国語学科文学研究室編：『津和野筑紫』筑紫、1968、岩波書店、p.602-611。
16）坂本・家永・井上・大野校注：日本書紀 上、日本古典文学大系67、1967、岩波書店、p.297。
17）坂本・家永・井上・大野校注：日本書紀 下、日本古典文学大系68、1967、岩波書店、p.305。
18）坂本他3人校注：日本書紀 下（前掲）p.306。
19）室賀信夫：『阿倍比羅夫北征考』史林、39-5、1956、p.1-17。
20）続日本紀 養老6年4月25日 国史大系編修会編、続日本紀 前編、1968、p.92-93。
21）村尾厚次：『百萬町開墾計画』和銅より室町にいたる奥羽開発史雲林6〜2、1955、p.2〜32。
22）この入植記事記載については、筆者は以前に整理しておいた。
山田安亮：東北日本における律令国家の漂移地帯、前掲、p.62・63。
23）漂移地帯の条里については、昭和47年4月20日の東北地理学会1972年大会に、「仙北地域における条里地割の存在に関する若干の問題」と題して中間発表した。東北地理24-3（1972）
24）東北日本の条里の概要については、柏倉亮吉：条里のこと（伊東信雄・高橋孝雄編：古代の日本、8巻 東北、1970、角川書店、所収）p.142〜155を参照した。
照合検討しなければならない。
そこで、関係遺跡相互の関係追究が可能であり、さらに古文献の記載内容と
照合検討することが比較的可能性が高く、且つ、遺跡の残存が多いこと、なお、
東北日本における律令国家漸移地域の開拓構造、および集落と地域の関係構造
を推論しうる資料は何かと考察せざるをえない。その条件を総て満しうるとは
考えないが、神社を地域的に研究することにより、若干それに接近しうるの
ではないかと考えるのである。『令集解』によると、古代集落は、定住を形成
すると、神社を勤請したと考察されるし、しかも村落における共同体の中核とな
っているので、神社組織の分析によっては、集落構造を把握しうる。また、
神社の信仰範囲の分析により、神社と地域の関連構造を追究することが可能に
なる。さらに、神社祭神関係の究明により、開拓の過程も把握出来るのであ
る。そして、その神社が、対夷政策において、本来の氏神的農業神から、国
家の守護神的な役割を果たすものとして、官社に昇格され、対夷前線の基地とし
て、重要な存在となった。この意味においても、神社を律令国家漸移地域の研
究に取扱える意義は大きいと考える。

2 神社と地域社会の結合

現在でもなお、多くの農村では、神社が農耕生活・精神生活の中核的存在で
あり、また村人達の共通の場と考えられている。なも、「神社」の神の前で、
村民同志が共同食事し、それによって村民各員の相互の親睦を深め、共同体の
紐帯を強固にしている。

かかる状態は、既に古代において行なわれていた。古代の村に神社が勤請さ
れたことは、『令集解』儀制令の古記は「春時祭田之日、諸国郡郷里、毎、村
在）（有の意）社神、人夫集祭、若、放釜祈年祭、也、行、諸社飲酒礼（略）」とい
い、また跡は「毎、郷村、立、社、人口集祭（略）」というから、律令時代には、
神社は村と結合して存在するようになっていたことが推論される。『令集解』

25) 国史大系編修会編：新訂増補 国史大系 第 2 部 5、令集解 後篇、1959、吉川弘文館、p. 723。
26) 山田安彦：古代日本の社会倫理と地域体系の成立、岩手史学研究 44号、1964、p. 1～22。
27) 神社については、原田敏明：神社一民俗学の立場からみる一、1961、至文堂を参照した。
28) 村落と神社の関係については、原田敏明：郷の村と村の社、社会と伝承 7～3・4 合併号、
1963、p. 1～19 を参照。
29) 氏神と産土神については、次の文献を参照した。
原田敏明：氏神と氏仏、社会と伝承 7～2、1963、p. 1～16。
和歌森太郎：国史における協同体の研究 上巻、1947、帝国書院 第 3 章 氏神・祖先神・産
土神、p. 350～468。
30) 山田安彦：古代日本の社会倫理と地域体系の成立、岩手史学研究 44号、1964、p. 6・7。
31) 翁我部静雄：古代における村と神社との関係、日本歴史 162号、1961、p. 2～7。
篤制令の古記にいう如く，社首と称せられる神宮がおかれ，田の神を祭り，神社を中心に村民が集合し，飲酒の礼を行ない，その共同飲食により共同体の紐帯をより強固にしたのである。このようなことは『播磨国風土記』掲保郡林田里や枚方里の条にも記載されている。

要するに，村民同志共同の祭事を行なうことにより，共同の生産活動に発展する。この際，司法を握るのは多年に亘り，農業経営の経験を積んできた古老である。また永年の経験がなければ，農耕の指導，農業行事の先導を務めない，長老格である経験者が社首・神官となる。かかる組織が村民の結団を堅め，また古代における社会倫理を形成する。このような社会倫理が共同体構造の基盤となり，地域の空間秩序を形成しているものと推論し，従って，神社と地域社会の関係に，重要な歴史地理学の課題が存在することと考える。

3 古墳文化的伝播から見た仙台平野の地域的様相

開拓前線が前進するので，従前の開拓地が畿内政府の組織下の地域的秩序に編成されてからのことである。換言すれば，開拓された生活地域が，国家体制下に編成されてから，開拓前線に前進することになる。従って，各遺跡分布を分析すると，弥生時代には，その生活地域は東北日本の北部にまで，拡延しているが，古墳時代になると，前・中・後期になると及ぶ，その生活地域の東北進は鈍化してくる。その内容を考察すると，東北日本における古墳中期（5世紀）の高塚古墳の分布は，鴨瀬・畑合両河川流域がその北限である。しかし，古墳時代後期前半（6世紀～7世紀初頭）になると，群集墳の分布は，阿武隈川下流流域に停滞する。この分布限界と国造の分布北限とが一致する。ここに一つの課題が存在するが，本稿では論じない。その時代の後期後半（7世紀後半）

32）井上通泰：播磨風土記新考，1943，大岡書店，p. 223～226，p. 247～248。
33）山田安彦：古代日本社会倫理と地域体系の成立（前掲）
34）本誌弥生式文化については，下記の文献を参照したので記しておく。
山田安彦：先・原史遺跡からみた東北の地域構造（前掲）
伊東信雄：考古学上から見た東北古代文化（前掲）
伊東信雄：蔵作の北進（伊東信雄・高橋富雄共編；古代の日本 8 巻，東北，1970，角川書店，所収）p. 22～42。
35）本誌における古墳文化的地域性については，次の文献を参照にして筆者が整理し要約することを試みた。
伊藤文三：五世紀の古墳（伊東信雄・高橋富雄共編；古代の日本 8 巻，東北，1970，角川書店，所収）p. 53～64。
氏家和典・加藤孝：「東北」古墳文化的地域的特色（近藤義郎・藤沢長治共編；日本の考古学 IV，古墳時代（上），1966，河出書房新社，所収）p. 135～140。
伊東信雄：考古学上から見た東北古代文化（前掲）
36）氏家和典・加藤孝：「東北」古墳文化的地域的特色（前掲）p. 513～514。
氏家和典：群集墳と横穴古墳（伊東・高橋共編；古代の日本 8 巻，東北，前掲）p. 65～84。
になると、横穴の分布が、北に向って拡張し、迫川水系流域に至る。

畿内から仙台平野までは、弥生式文化は勿論、古墳文化も抵抗なく伝播したが、仙台平野に入ってから停滞状態となった。そこで、律令政府が東北経営を積極的に進展させることに、天平から宝亀にかけて、仙北地帯に開拓拠点であり、且つ対夷政策の前線基地である城柵を配置した。しかし、奈良朝の後期から律令体制の矛盾が顕在化し、律令政府は東北経営に充分な施策を実施し得なかった。さらに後述するが、仙北地帯の自然的条件が律令国家の消長地帯の進展を停滞させる結果となった。従って、この地帯の律令国家の進展状態を分析することは、古代東北日本の歴史地理的研究において重要な課題解決の端緒を把握することになる。

4 仙台平野の自然的特質

仙台平野は大きく2つの地形的単元よりなる。その1つは第3紀層からなる標高100m～200mの丘

37）氏家和典：辺境における横穴古墳群の諸問題—陸前の場合（考古学硏究会十周年記念論文集、日本考古学の諸問題。1964、所収）p.203～229。

氏家和典：横穴古墳にみられる古代東北開拓の様相—陸前（宮城県）の場合、古代文化 15～3、1966、p.61～68。

38）仙北地帯に存在した天平の5冊と伊治・桃生両城から推論しうる。

39）仙台平野の地形および表層地質については、下記の文献を参照した。

藤原康範：「宮城県」の地形 （宮城県観；宮城県史5、地誌・交通史、所収）p.37～81。

経済企画庁国土調査；仙台一土地分類基本調査、地形・表層地質・土壌。5万分の1、1967。

陵性台地（陸前丘陵）であり，他の1つはその丘陵間に形成された沖積平野（陸前平野＝仙台平野）である。このように丘陵・平野・丘陵という配列が，古来からこの地域に複雑な地域差を生じさせる要因となった。なおその配列構造が社会構造・地域構造にも複合的な重層構造の地域相を形成する基盤となったのである。

また，仙台平野は地形的構造から大きく2分される。七北田・松島丘陵を境に，以北と以南に分かれ，前者を仙北平野，後者を仙南平野と呼ぶ。仙北平野は，七北田・松島丘陵を取巻く如くに，丘陵と平地が半環状に交互に配列され，その平地を流れる河川が樹枝状に伸び，相接近する状態となり，洪水常襲地を形成する。仙南平野は，概していえば，丘陵と平野が南北に長く，しかも東西に配列されている。仙台市街東南に展開する七北田・名取の河口平野を狭義の仙台平野ともいうが，本稿ではこれを宮城野平野と呼称することにする。

さて，律令国家新政府地帯の焦點となる仙北平野について観察すると，標高10mの等高線
を迫れば、吉田川流域では海岸線より約 23km も内陸に入った「枡和田」付近に至り、鳴瀬・江合両河川流域では東北本線「小牛田駅」付近にまで及ぶ。さらに、北の小山川流域では、10m 等高線が「総峰川前」まで入り、迫川水系流域では、海岸線から約 46km もの内陸の「若柳」にまで至るという低地状態である。従って、仙北平野の河川流域の大部分は等高線 10m 以下であるといえる。現在の地形図を観察しても湿地・沼沢地・湿田が卓越していることを容易に理解しうるが、それが、明治後半から大正初期にかけて測量した地形図を見るときより広範囲に低湿地が分布しており、居住不適の範囲が多い。これから推察すれば、古代ならば居住不適の範囲がより広いことであろう。仙北地域は近世以降、新田開発が積極的に進められていている。かかる地形的様相であるから、仙北平野における

第3図 アイオン黒風時における仙台平野北半部（仙北平野）の灌水区域
1. 等高線100m以上  2. 湿地  3. 灌水区域（約5日～約25日）

40）岩手大学総合図書館保管
41）平重道：迫川流域における新田開発と水害の歴史（資源開発論：北上流域水害実態調査—アイオン黒風による水害について、1950、所収）p.262〜281.
集落の分布は、丘陵や台地の斜面が顕著に多い。
なお、仙北平野では等高線10mより上流では、平野の傾斜が急激的に変化する。この地形的構造が、この平野の特色である。
かかる地形的構造の条件と観察状況発達する河系の条件とが相まって、仙北平野を洪水常襲地に形成したものである。つまり、洪水常襲地の主要因子は地形と河系であるといえる。そして、この平野に洪水という宿命を背負わせたのである。洪水防禦ということが、仙北平野における歴史上の地域課題となっている。洪水常襲地であることは、当平野各地に残存する古文書その他の資料によって明確であり、また近年の洪水状態からも推論しうる（第3図）。仙北平野の自然的基礎が果す歴史地理学上的役割については、近将来に、稿を改めて論を展開する。

第4図 仙台平野における沖積層とグライ土層の分布図
1. 等高線100m以上 2. 湖沼 3. 沖積層 4. グライ土層

北村信：宮城県地質図（1967）および経済企画庁総合開発部国土調査課：土地分類図 土塁図II（東北地方）（1969）より作成。

42) 滝雪地方農村経済調査所編：東北地方農業に関する資料調査、滝雪地方農村経済調査所報告、8号、p.3-47。仙台管区気象台編：宮城県気象災害年表 気象協会本部 1963。
小牛田町史編纂委員会編：小牛田町史 上巻、1970、p.517-521、災害とききかん。
43) 資源協会編：北上川流域水害実態調査—アイオン観測による水害について、1950、p.21-23。
要するに，仙北平野は低湿地域が広大な範囲を占めており，これに伴いグラ
イ土層や泥炭地層の分布も広い（第4図）．これらが古代の生活に種々の面に亘
って影響する．巨視的に仙北平野を展望すると，平行式遺跡の分布が稀薄であ
り，高塚古墳・横穴・溝城・古代寺院院・古代瓦窯跡の分布が丘陵壌面や疎，
および小丘に立地するということは，仙北平野を広範囲に亘って沼沢地や低湿地
が占めていたためである．勿論，この低湿地が農耕や古代製瓦に大きな役割を
果たしたことも忘れてはならない．しかし，仙北平野を広範囲に亘って，断続
的に沼沢地や低湿地域が分布するために，居住や交通の障害となり，律令国家が
国家組織体制内に地方行政を編成し，地域を掌握する障害にもなったことであ
ろう．かかる障害条件の中に，律令国家の漸移地域の前進を停滞させる一つの
要因が潜在しているのも知れない。

5 郷の形成から見た漸移地域の構造

律令体制の東北地方への浸透は，当時行政体制から考察するのが早道
であろう．何故なら，建郡の意味をするところは，開拓のために入植し，定住
して形成した集落が，律令国家の行政組織体制のなかに編成されるだけの生活
地域を構成していたことになる．当時，国家体制の行政組織内に編入されると
いうことは，2里以上の集落が形成されていたことであり，「里」は50戸より
なるという法定的規制がある．これは，単に50戸が存在したというだけではな
く，「課役の民」＝「公民」としての機能を果たすことである．すなわち，戸
籍に登録されて，口分田を支給され，租税を負担する公民が一定数定住していた
ことになる。

奥羽の建郡について，続後その他の六国史の関係記事には，疑問の点が少な
くなく，近年，伊東信雄・高橋富雄・板橋源・服部昌之の諸氏による精詳な論
考が相次いで公にされた．評論はそれらの論稿に謳るとして，律令国家の漸移
地域帯の進展という視野から，建郡の東北地方の進展を時代的に地域区分し，郷形
成から建郡内容を分析して，国家的開拓の課題をとらえてみたい．ここでは主
として陸奥の場合を取挙げる．それらの論説を基にして，筆者が推論すると，

44) 福井英夫；耕地土壌と河川の水質（宮城県編；宮城県史；5，地誌・交通史，1960，所収）
    p. 191〜125。

経済企画庁総合開発局国土地調査課；土地分類図図案図，1，東北地方，1969。

45) 令義解 第2戸令，国史大系編修会編；令義解，1968，p. 91。

46) 伊東信雄；宮城県の古代史（宮城県編；宮城県史1，古代，中世篇，1957，所収）p. 96〜102。

47) 高橋富雄；古代における陸奥国，文化 17〜3，1953，p. 265〜268。

48) 板橋源・佐々木博康；陸奥国栗原郡成立年代に関する私疑，岩手大学学芸学部研究年報，18
    巻，1961，p. 11〜20。

49) 服部昌之；東北地方における郡の成立，史料 46の2，1963，p. 138〜165。

— 11 —
名取平野まで、すなわち名取郡までの各郡は、大化（645～649）から和銅年間（708～714）に建郡されたものであろう。宮城郡の場合、陸奥鎮所（多賀城）の造営と重要な関係があり、その建置は神亀年間（724～728）か、天平初期（729～735）であろうと考えられる。これより北、仙北地帯をみると、天平14年（742）には、既に、黒川郡以北11郡が建置されていたのである。この11郡というのは、黒川・色麻・富田・貫米・志田・長岡・遠田・小田・新田・玉造・牡鹿の各郡であり、そのうち遠田と貫米は、天平9年（737）の統紀に記載されている。従って、黒川以北11郡は天平9年前から天平14年までの間に建郡されたものであると考えてよい。それより北の栗原郡は、神護景雲元年（765）、あるいは神護景雲3年（767）の設置であるといわれる。また桃生郡は桃生城の造営と関係があり、天平宝字年間（757～764）に、牡鹿郡から分置されたと推論しよう。

要するに、建郡は時代的に4地帯に区分しうる。すなわち名取郡までの地帯、宮城郡、黒川以北11郡、それにその外延地帯である。

養老戸令の行政組織における「里」は、霊亀元年（715）に「郷」と改称され、「郷」の下に「里」が設置された。しかし、これは施行後25年にして、天平年間（729～748）に廃止され、「郷」だけが残った。その「里」が自然村落であるか、また隠蔽村落であるかは論定しない。50戸1郷制になってから後の里は、郷の下で小字の如くになって存在するようになった。また、村というのも、地方の末端の集落名として呼称され、播磨風土記の記載によると、里の前身が村であり、それは自然村であったといわれる。東北地方の場合、「陸奥戸籍断簡」から推考すると、「里」には入植村落の様相が見られ、計画的村落であったと筆者は考える。奈良時代初期の仙北平野の新田郡（現在の遠田郡西部、栗原郡南部）には、既に郷里制が施行されていたことは、遠田記記年町木戸瓦黒跡から発

50）工藤雅樹：多賀城の起源とその性格（伊東・高橋共編：古代の日本 8 巻、東北、1970、角川書店、所収）p. 85～111。
      多賀城町誌編纂委員会編：多賀城町誌、1967、p. 50～58。
51）統日本紀 天平14年正月23日、国史大系編修会編：統日本紀 前篇、1968、吉川弘文館（以下この例を使用）p. 167。
52）統日本紀 天平9年4月14日、国史大系編修会編：統日本紀 前篇、p. 143～144。
53）統日本紀 神護景雲元年11月、国史大系編修会編：統日本紀 後篇、p. 349。神護景雲元年11月乙巳の条に、栗原郡建置の記載はあるが、11月には乙巳はない。来来からそれは譲節とされているので、日本紀略の同年10月乙巳に従う。東北大学東北文化研究会編：蝦夷史料、1957、吉川弘文館、p. 33。
54）誌48の板橋・佐々木論文は、神護景雲3年6月に栗原郡の創建されたと論究している。
55）統日本記 天平宝字2年10月25日・12月8日、天平宝字3年9月26日・天平宝字4年正月4日、国史大系編修会編：統日本紀前篇、p. 256・257、265。
56）神武天皇の統治：古代における村と神社との関係、日本歴史 152号、1961、p. 6。
57）陸奥国戸籍、竹内理三編：寧楽遺文 上巻、1965、東京堂出版、p. 84～85。断簡の記録に、「移出」「移住」および「今移来」という註記があることから推察しよう。
見られた文字瓦の刻字「（次）郡仲村郷他辺里長，二百長支部皆人」によって証左されるのである。倭名類図抄によれば，仲村郷は新田郡にあり，現在の要原郡高清水の東にその地名が残る。概ね，栗原郡高清水町の高清水・藤里・清滝，遠田郡田尻町小松・大崎の範囲に比定ししょうる。

さて，律令国家の遷移地域における郷形成を考究し，律令国家体制の東北日本への波及を見るには，『倭名類図抄』によるほかはない。その編修時期について，種々の学説はあるが，大体，承平年間（931〜938）であろうといわれている。従って，律令国家の対夷政策の時代よりも，1世紀半後になる。この時代間隔はあるが，この時代は社会経済や地域の変化が緩和であり，郷形成の変化も顕著ではなかった。事実，池辺弥の研究によると，和名抄編修時期の郡郷と律令時代のそれとは甚大な差違はないという。

『和名抄』による陸奥国各郡の郷数を掲げると第1表の如くである。その郷数表を見ると，明確であるが，陸奥南半の郷数は多い。中通り，沢町りの厳密

<table>
<thead>
<tr>
<th>第1表 陸奥国各部内の郷数表</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>郡名</td>
</tr>
<tr>
<td>白河</td>
</tr>
<tr>
<td>浜通り方面</td>
</tr>
<tr>
<td>菊敷</td>
</tr>
<tr>
<td>仙台平野</td>
</tr>
<tr>
<td>那田（刈田）</td>
</tr>
<tr>
<td>克田（黑川）</td>
</tr>
<tr>
<td>新田</td>
</tr>
<tr>
<td>気仙</td>
</tr>
<tr>
<td>北上川流域</td>
</tr>
<tr>
<td>磐井</td>
</tr>
</tbody>
</table>

58）高橋富雄：『蝦夷 前掲，p. 247〜248。
59）本稿では，京都大学文学部国語学国文学研究室編；諸本集成 倭名類図抄 本文篇，1968，臨川書店を使用した。
60）吉田東伍：増補 大日本地名辞書 奥羽（7巻），1970，p. 487。
61）池辺弥：倭名類図抄『郷名』考，成城文芸 17号，1959，p. 10〜21。
62）池辺弥：倭名類図抄，餓名考（前掲）

池辺弥：古代郷名考集成，成城文芸 17号，1959，p. 22〜74。
池辺弥：古代郷名考集成，成城文芸 20号，1659，p. 102〜138。

池辺論文に対して，坂本啓二が精詳な論考を加え，抄の郷名の成立を9世紀前半から後半にかけての時期とするよりも，10世紀に固定した郷名は，実質的に9世紀末に固定したと考究している（太田文からみた郡郷・別名制について，満学大学学芸学部紀要 14〜17号）
第5図 陸奥・出羽における律令時代の郡域図

な範囲の設定には、種々論義はあるが、郡数表の如く、巨視的に地帯区分すると、中通りでは、会津を除き、郡内最少郡数は8郷で、最多の郷数は17郷であり、平均して10郷である。浜通りでは、最少郡数が4郷で、最多の郷数が12郷であり、平均すると6.2郷になる。しかしながら、仙台平野に入ると、郡内最少郡数は2郷で、最多の郷数は10郷であり、平均4.2郷である。したがって、福島県の中通り・浜通りでは、律令国家体制の行政組織が早くから浸透し、その行政下の集落の形成が進んでいたことを物語ることになる。

要するに、仙台平野一帯は郡数が示すように、律令国家体制の漸移地帯であ
ゆる。養老戸令による郡の行政的所轄区分によると、
「下郡」「上郡」に属する郡はなく、
「中郡」に所属するのが、宮城と柴
田の2郡であり、
郷数表を通観すると明確であるが、
宮城郡以南の仙南地帯の方が、仙北地帯よりも、およ
び律令国家体制下の地方行政組織に
編入される集落の
形成が進展している。仙南の場合、
平均して郡内の郷数は6.3郷である
が、仙北では、その平均は3.3郷で、
その集落形成は進
んでいない。仙北地帯の各郡は、「下郡」か、「小郡」である。前者に属するのは、
色麻・玉造・栗原・新田・小田・桃生の6郡であり、後者に相当するのは、
黒川・賀美・志太・長岡・遠田・登米・気仙・牡鹿の8郡である。これ所詣は、
仙北地帯に律令的デスポティズムの支配体制の増長が不充分であり、律令的地
方行政組織に編入される集落が少なかったことを意味する。まさに律令国家の
営移地域の北限地域であり、大体において、城柵を中核として、管郡範囲が
存在するが、郷の形成はおぞい。すなわち、律令国家の国家的開拓の進展が充
分ではない、班田収授による公民（課役の民）の定住する集落が少なく、律令
体制内の生活地域の形成内容が稀薄であったことになる。しかし、仙北地帯の

第6図 隆奥国各部の管轄郷数一覧図
凡例の数字は郡内の郷数であり、上から小郡・下郡・中部・
上郡・大郡である。

63） 国史大系編修会編：令義解，1968，p.91. 2〜3里よりなる郡を小郡，4〜7里の郡を下郡，
8〜11里よりなるのを中部，12〜15里の郡を上郡，16〜20里よりなる郡を大郡とする。
式内社の分布は、仙南地帯よりも濃厚である。少し、前記を顧みると、令集解の記載や跡にいう如く、郷村の形成と神社の築造が結合していることから、考察して、郷の形成が発達しておれば、神社の存在も多いことになる。このあたりに、律令国家の発散地帯の課題が所在するのではないかと思う。次に式内社の分布を検討しよう。

6 陸奥における式内社の分布

古代東北日本における神社の分布を分析するには、式内社の分布から推論する以外に方法はないが、しかし式内社のみで、古代の神社を論定するのが慎重なければならない。六国史に所載された神社で、式内社として延喜式に記載されていない神社が、陸奥国4社、出羽国に9社もある。また、後述するところの鹿島神社の皆社38社のうち、式神名帳に記載されている社は、香取神社裔社の2社を加えて10社に過ぎないのである。かかる状態から推察しても、式神名帳に記載された神社以外に、律令時代に存在した神社は少なくなかったと考えられる。

第2表 陸奥国における式内社の郡別分布表

<table>
<thead>
<tr>
<th>郡名</th>
<th>貞観前</th>
<th>貞観</th>
<th>貞観後</th>
<th>総数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>白河</td>
<td>4</td>
<td>3</td>
<td>7</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>磐瀬</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>安積</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>5</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>安達(信夫)</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>安耶</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>安津</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>菊城</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>模城</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>行方</td>
<td>6</td>
<td>2</td>
<td>8</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>宇多</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>伊具</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>郎理</td>
<td>4</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>岳田</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>喜田</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>柴田</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>名取</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>宮城</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>黒川</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>色麻</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>賀美</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>志太</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>玉造</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>長岡</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小田</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>遠田</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>桃生</td>
<td>6</td>
<td></td>
<td></td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>牡鹿</td>
<td>10</td>
<td></td>
<td></td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>栗原</td>
<td>6</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>新田</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>登米</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>碧井</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>江刺</td>
<td>4</td>
<td></td>
<td></td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>旭沢</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>斯波</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>気仙</td>
<td>3</td>
<td></td>
<td></td>
<td>3</td>
</tr>
</tbody>
</table>

合計 59 31 10 100

64）大塚徳郎：『式内の神々（伊東・高橋共編；古代の日本 8 巻、東北、1970、角川書店、所収）』 p.214～227.
しかしながら、古代の陸奥国全域の神社の分布を概観するのには、式内社の分布から推論するほかはないので、一応第2表に、郡別の分布表を掲げてみよう。

その分布表を通覧すると、中通り方面では白河・安積・安達の3郡に、浜通り方面では磐城・行方・亘理の3郡にその分布が多い。仙台平野では、七北田・松島丘陵以北、すなわち仙北平野に多く、北上川中流域域では胆沢郡に式内社の分布が多い。

奈良時代における律令国家の転移地帯における旧式内社の分布を精詳に分析することにしよう。宮城郡以南の仙南平野には13社しか鎮座しないが、黒川郡以北、すなわち仙北平野には36社も座す。前章で論述したが、仙南地帯の各郡の律令国家体制下における地方行政組織に編入される集落の形成は、仙北地帯の各郡のそれよりも進展していた。仙南各郡内の平均郷数は6.3郷であり、仙北のそれは3.3郷である。戸令の規定通りに考えれば、神社の数もその比率で存在することになるが、式内社の分布数をみると、仙南の各郡は平均して2.17社であり、仙北の各郡は平均2.77社であって、仙北地帯の方に式内社の分布は比較的多い

第7図 陸奥国における式内社の郡別分布図
1. 貞観前 2. 貞観年間 3. 貞観後

仙北平野には、36社も座す。前章で論述したが、仙南地帯の各郡の律令国家体制下における地方行政組織に編入される集落の形成は、仙北地帯の各郡のそれよりも進展していた。仙南各郡内の平均郷数は6.3郷であり、仙北のそれは3.3郷である。戸令の規定通りに考えれば、神社の数もその比率で存在することになるが、式内社の分布数をみると、仙南の各郡は平均して2.17社であり、仙北の各郡は平均2.77社であって、仙北地帯の方に式内社の分布は比較的多い

65) 延喜式内社については、虎尾俊哉：延喜式、1964、吉川弘文館、および宮城栄昭：延喜式の研究論述、1957、大修館書店、p. 444～510、および志賀崎：式内社の研究第1卷、1960、神道史学会、p. 1～216を参照した。
66) 延喜式式内社の分布については、国史大系編修会編：延喜式前篇、1959、吉川弘文館、p. 255～261、および内務省：特殊神名帳、1925、京都甲陽堂、p. 457～479に拠った。
ことになる。勿論、これだけの数値で論定することは慎まなければならない。実数でいえば、仙南は6郡で38郷、式内社は13であり、仙北は13郡で43郷、36社である。郷と式内社との数的関係をみると、仙南は大体3郷に1社、仙北は1.2郷に1社が鎮座することになる。この点に歴史地理的課題が潜在するのである。因みに、陸奥国全域で式内社が100社あるが、七北田・松島丘陵、すなわち仙南・仙北の境をもって、以南に丁度50社、以北に50社が存在することになり、この真半分の数の一致は偶然なのであろうか。

仙北平野のうちでも、多賀城から色麻柵・玉造柵・伊治城に至る道路の沿線と、多賀城から亀鹿柵を経て桃生城に至る道路の沿線に、式内社の分布がみられる。殊に、仙台湾奥に控える仙北の海岸平野に式内社の分布が濃密である。このことも後述するが、関東南部から、太平洋沿岸にあって、海路で陸奥に入ってくる場合、仙台湾奥に突き当り、しかも河口付近に上陸するのが、一般に考えられる状態であり、そこに式内社の分布が多い。なお、城柵周辺には柵戸が配置され、開拓が進められる。従って城柵の周辺に条里の分布も推察しよう。開拓集落が形成されるので、式内社の存在も多い。

さて、城柵と式内社との分布関係についてみると、次の如くである。多賀城市街にある多賀城柵周辺には多賀（多賀城市大字高崎市街の西にあった、現在は加瀬沼の南岸にある上社宮に合祀）・伊豆佐売（宮城県宮城郡利府町大字飯土井）・志波彦（仙台市岩切の北、若宮前に鎮座した）・鼻節（宮城県宮城郡七ケ浜町花肯浜）の4社が鎮座する。宮城県宮城郡色麻村四竈に推定される色麻柵と同郡中新田町城生に推定される玉造柵は約4kmしか離れていない。

この両城柵の周辺には、伊達（色麻村四竈）・風豊（同郡小野田町大財の対岸、鳴瀬川右岸の丘陵性台地に座る）・篠美石（同郡宮城町谷地森）の3社がある。宮城県栗原郡篠原町城生野にある伊治城の周辺には、香取御児（宮城県栗原郡篠原町大字

67) 工藤雅樹；多賀城の起源とその性格（伊東・高橋共編：古代の日本 8 卷，東北，1970，角川書店，所収）p. 85～111。

68) 村山貞之助編；中新田町史，1964，p. 664～669。

69) 村山貞之助；色麻柵について、仙台郷土研究 1931年9月～10月号

70) 村山貞之助編；中新田町史，1964，p. 657～664。
第8図 仙台平野における城柵と式内社の分布図
I. 城柵（1. 長居柵 2. 牡鹿柵 3. 新田柵 4. 色麻柵
5. 玉造柵 6. 伊治城 7. 中山柵 8. 桃生城） Ⅱ. 式内
社（鎮座地点の明確な神社のみを図示。現在の鎮座位置を示す）。

71) 高橋富雄：蝦夷，前掲，p. 218。
三宅宗議：奈良時代の牡鹿郡に関する予察—牡鹿柵と郡域をめぐって，宮城県石巻工業高等学校
研究集録 第1集，1970，p. 41～47.
72）伊東信雄：宝亀の蝦夷乱，前掲，p. 135。
高橋富雄：蝦夷，前掲，p. 218～221。 筆者は斎藤芳郎・伊藤泰英氏の案内で臨地調査した。
73）高橋富雄：蝦夷，前掲，p. 214～216。 筆者は豊原誠一・斎藤芳郎氏の案内で臨地調査した。
74）伊東信雄：大野東人の陸奥経営，前掲，p. 115。
ると、先ず特徴的なことは、等高線10m以下の地域には立地することが少ないことである。立地する神社があっても、そのなかで微地形的に見て小丘に鎮座することがわかった。なお、式内社の分布も、城柵の立地も、グライ土層分布地域の周辺にあることも注目すべきである。すなわち低湿地、沖積平野の低平地で、しかも、水利に利便な地域を前面に控えるのは、農耕生産の基礎を確保しておいて、集落を形成したものと考えられる。逆に、式内社の分布の稀薄な地域は、鳴瀬・江合両河川の下流域、および追川下流域であり、篤令当時の郡域でいえば、長岡・志太・小田・遠田・登米の諸郡である。それらの地域は河川の氾濫原であり、甚しい低湿地帯を形成している。加えて等高線10m以上の地域は、急激に傾斜が変化して、洪水を惹起する条件の帯である。所説は、洪水常襲帯であるため、農耕・居住に不適であり、従って、式内社の分布は稀薄となる。

かかる地形的条件と式内社の分布との関係は、仙南平野においても同様のこととがいえる。さらに、式内社の分布を考察するために、式内社の祭神をその視野の中におき、その分布から地域間相互の関連を探究することにしたい。

7 鹿島・香取神社裔社の分布

首社と裔社との関連から地域間の結合と関東から陸奥に入植する過程を探求するために、裔社の分布を考究するのである。鹿島神社宮司の奏言によれば、陸奥に鹿島神社の裔裔社が38社も鎮座する。その全神社の所在については不詳であるが、そのうち10社は式内社である。鹿島神社の裔裔社の分布を表にすると、第3表の如くである。

<table>
<thead>
<tr>
<th>菊多</th>
<th>1</th>
<th>菅城</th>
<th>11(1)</th>
<th>樺葉</th>
<th>2</th>
<th>衆方</th>
<th>1(1)</th>
<th>未多</th>
<th>7</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>信夫</td>
<td>(1)</td>
<td>伊具</td>
<td>1</td>
<td>宮里</td>
<td>2(3)</td>
<td>宮城</td>
<td>3</td>
<td>黒川</td>
<td>1(1)</td>
</tr>
<tr>
<td>色麻</td>
<td>3</td>
<td>志田</td>
<td>1</td>
<td>小田</td>
<td>4</td>
<td>島鹿</td>
<td>(1)(1)</td>
<td>栗原</td>
<td>(1)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（）内は鹿島神社裔社の式内社（内数）信夫郡は貞観8年の鹿島神社宮司の奏言にはないが、式内社は1社ある。宮里郡の宮里に2社であるが、その裔社系統の式内社は3社鎮座する。

○内は香取神社裔社の式内社

さて、東北経営に参画した中央の有力名族は、中臣氏（藤原氏）であり、中臣氏は常陸の鹿島とは関係が深く、鹿島・香取を根拠地にして、太平洋沿岸に沿って陸奥に北進していることを、裔社の分布により追究しろう。当時、開拓を

75）貞観8年（866）正月20日、常陸・鹿島神社宮司が神国に出す簡易便が陸奥を入れることを願い出た奏言である。国史大系編修会編；日本三代実録 前篇，1959，p. 173～174.

— 20 —
前進させる時，開拓の基地となった集落に裔神を祀り，この神威を奉じてさらに開拓を前進させているのである。

その裔社に当る式内社の分布をみると，磐城郡の藤原川下流鹿島に1社（鹿島神社）あり，行方郡の1社は，今の相馬郡真野川下流鹿島に裔島御子神社が鎮座する。信夫郡の1社は，福島市栄奈島谷野に鹿島神社が位置し，亘理郡の3社は，宮城県亘理郡亘理町逢隈の阿武隈川河口に，鹿島伊都乃和気神社・鹿島総名太神社・鹿島足和気神社で鎮座する。黒川・栗原両郡の名1社の所在は明白でないが，前者のそれは宮谷大字大亀にある鹿島天足別神社であろうし，後者のそれは，築館町大字築館の香取御子神社であろう。牡鹿郡の2社の1社は鹿島神社の裔社である鹿島御子神社であり，他は香取神社の裔社香取伊豆乃御子神社である。前者は北上川河口，石巻市日和山に，後者はその約20km上流の桃生郡前谷地和津（現河南町）に鎮座する。さらに，筆者が調査を進めて，把握したことがある。それは色麻郡にある3社の裔社のことである。貞観8年（866）の鹿島神社宮司の奏言によると，色麻郡にその裔社が3社鎮座する。その色麻郡は延暦18年（799）に宮田郡を併せ，その後戦国時代，色麻郡は賀美郡に合併した。従って，現在の中野田町の中野田と鳴瀬は，律令時代の色麻郡の
安蘇郷に、中新田町の広原は、当時の色麻郡相模郷に比定される。そうすると、中新田町の「中新田」と「四日市場」の境にあり、鳴瀬川左岸に併生する鹿島神社、その東北 2.5 km、同町「平柳」の西北に当り、多田川を中羽前街道が渡る東南軸に座す鹿島神社、および多田川のその下流 2.3 km の右岸「矢ノ木」に鎮座する鹿島神社が、前述のいわゆる色麻郡の鹿島神社総社 3 神に想定されるのである。

陸奥を通覧すると、鹿島・香取の総社神の分布は、陸奥の太平洋沿岸にあり、しかも河口から、河川下流域に多い。これ所説は、関東から東北開拓に入植する場合、船で陸奥国に向い、水田稲作に適当な河川下流域に、鹿島・香取の祭祀共同体が定着したものであろう。南関東から船で陸奥に入植したことは、『常陸国風土記』や続紀に記載された内容により、推論し得る。

勿論、東北日本への入植は、鹿島・香取の総社の祭祀共同体だけではなく、六国史によると、出羽側では大化 4 年（648）に始まり、神護景雲元年（767）までに 10 回、陸奥側では靈亀元年（715）から延喜 21 年（802）まで続き、その間 13 回の入植が行なわれた。六国史上の入植記載の整理は、すでに拙稿において試みておいた。六国史上の記載内容や統計数値だけで、論定するのは慎重なければならない。それらの入植は主として、城柵の存在する宮城郡・桃生郡・栗原郡などの地域である。しかし、それは六国史上に記載された入植地域であるが、それだけでなく、他国から入植したことは、郡里名から推察しうる。なおそのことについては別の機会に論じたいが、陸奥に入植させた反面、律令政府は在来の陸奥住民を、陸奥以外に分散移住させている。

8 入植地域の吟味

入植地域を郡郷の地名の分布から吟味したい。それには、律令国家の東北経営の時代より約 1 世紀半後になるが、『倭名類聚抄』の郷名から分析してみる。その結果を表にしてみると、陸奥諸郡の郷名には、東海・関東および陸奥南部の諸郡・諸郷に因む地名が多い（第 4 表）。しかし、その地名は、入植者の出身地名に因んで命名されたものか、あるいは偶然の一一致なのかは論定し難い。それを考察する資料が余りに貧弱である。敢えていえば、他国の郡郷名に因む郷名の分布は仙北地方に多い。すなわち、律令国家の漸移地帯である仙北地方

78）吉田東伍；増補大日本地名辞書, 奥羽, 前掲, p. 453・454.
79）常陸国風土記、香取郡の条，秋本吉郎校注；風土記，1958，岩波書店，p. 73.
80）続日本紀，宝亀 7 年（776）7 月 14 日，宝亀 11 年（780）7 月 22 日，天応元年（781）2 月 30 日，国史大系編修会編；続日本紀，後編，1968，p. 428・429・462・467.
81）山田安彦；東北日本における律令国家の漸移地帯，前掲，p. 62・63.
第4表 他国の郡郡名と類似する陸奥国内の郡郡名一覧表

<table>
<thead>
<tr>
<th>郡</th>
<th>名</th>
<th>郷</th>
<th>名</th>
<th>陸奥国内の郡郡名と同名あるいは類似する他国の郡郡名*</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>白河</td>
<td>丹波</td>
<td>丹波国</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>安達（信夫）</td>
<td>日理</td>
<td>下総国印幡郡日理郷、美濃国賀茂郡日理郷</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>那田（刃田）</td>
<td>三田</td>
<td>美濃国山県郡三田郷</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>栗田</td>
<td>新羅</td>
<td>境化人との関係？</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>名取</td>
<td>磐城</td>
<td>陸奥国磐城郡</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>宮城</td>
<td>磐城</td>
<td>陸奥国磐城郡</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>白川</td>
<td>陸奥国白川郡</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>黒川</td>
<td>白川</td>
<td>陸奥国白川郡</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>賀美</td>
<td>常陸国多珂郡賀美郷・武蔵郡加美郷</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>郷</th>
<th>名</th>
<th>相模国</th>
<th>相模国</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>安蘇</td>
<td>上野国安蘇郡</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>玉造</td>
<td>信太</td>
<td>陸奥国信太郡、陸奥国志太郡</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>志太</td>
<td>駿河国志太郡</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>栗原</td>
<td>会津</td>
<td>陸奥国会津郡</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小田</td>
<td>賀美</td>
<td>常陸国多珂郡賀美郷、武蔵國加美郡</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>登米</td>
<td>行方</td>
<td>陸奥国行方郡、陸奥国行方郡</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>桃生</td>
<td>磐城</td>
<td>陸奥国磐城郡</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>牡鹿</td>
<td>賀美</td>
<td>碧河常陸国多珂郡賀美郷、武蔵国加美郡</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>碧河</td>
<td>下総郡香取郡小川郷、武蔵国多摩郡小川郷</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>江刺</td>
<td>信濃</td>
<td>信濃国</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>甲斐</td>
<td>甲斐国</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>船波</td>
<td>下総</td>
<td>下総国</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>上総</td>
<td>上総国</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

* 陸奥国内の郡郡名で、同国内の郡郡名と同名、あるいは類似する場合もある。類似する他国の郡郡名については、主として関東、東海地方について照合することにした。

に、その類似する地名が多いことは、六国史の記載を併せ考えると、かなりの入植が行なわれたと推し考えよう。なお因みに、城柵毎に配置された柵戸の入植は、六国史上的記載だけでも桃生城（柵）に5回、伊治城に4回、多賀城に2回である。仙北地域に入植が各地から多かったのは、他国の郡郡名と類似する地名の分布から推察される。これと併せて、在来からの陸奥住民の分散移住の
状態を考えると、漸移地帯における住民交換により、局地的地域におけるいわゆる蝦夷住民の地域集団の分断をはかったのではないかと考えられる。植民開拓により水田を拓き、里を施行し、在来の陸奥住民の地域的組織を律令的に編成したものと考えられる。それが証拠に、玉造査・伊治城周辺に里があったことを、筆者は検出した。これについては、近い将来に稿を改めて論じよう。それは当然、古代ローマにおいて、地域集団の共同体組織を分断する政策と相通ずるものを見出さざるをえない。勿論、その具体的政策は相異なるが、古代ローマはアッソナチオ（assignatio）＝市民への土地割当によって、在来の農村共同体と地域的村落結合を根底から粉砕したのとやや共通するのである。

さて、陸奥の郡県名が陸奥以外の国の郡県名に類似するか、あるいは陸奥国の郡名が陸奥国内の郡名と類似する。この類似することとは入植者の出身地の地名に因んだものか否かについて、神社との関係において考察する材料を若干、次に説述しておく。なお、直接的に関係はないが、現在の入植開拓地をみても出身地の地名を、その開拓地に命名して場合がある。例えば、岩手山麓開拓地帯に、多くその例が存在する。

仙北平野南部を占める色麻郡についてみると、郡内は相模・安蘇・色麻・余戸に分れる。相模郡は相模の国名、安蘇の郡名は上野国安蘇郡の郡名、色麻の郡名もも、播磨国の那磨郡の郡名と類似する。しかも、色麻郡には伊達神社がある（第9図）。その神社は色麻村四社に鎮座する。一方、山陽の播磨国那磨郡印達郡に射楯兵主神社があり、今は姫路城の東南に鎮座する。それら両者の村名・郡名および神社の系統が類似したり、同一系統であるのは偶然に一致であろうか。むしろ、その神社信仰の同族の一集団が遷住したために、同一神社を奉じ、出身地の地名に因んで命名したと解釈すべきか。

また、仙北平野東南を占める牡鹿郡についてみると、郡内は賀美・碧河・余戸の3郷よりなる。賀美郡は常陸国多河郡賀美郷・武蔵国加美郡、および陸奥賀美郡とも同名であり、碧河郡は下総国香取郡小川郷と武蔵国多摩郡小川郷と類似する。牡鹿郡一帯と付近は、前述した如く鹿島神社裔社の分布もあり、また太平洋沿岸は常陸と関係が深い。従って、下総の香取郡小川郷との関係を無視しない。碧河郡の範囲を現在の何処の行政地域に当たるか具体的に比定しないが、当郡から宝亀2年（771）頃に桃生郡を分置した際、賀美郡とともに碧河郷

82）渡辺金一・弓削達：マックス・ウェーバー，古代社会経済史，1959，東洋経済新報社，p. 354。
83）吉田東伍：増補大日本地名辞書，中国・四国，第3巻，1970，p. 137。
84）吉田東伍：増補大日本地名辞書，坂東，第6巻，1970，p. 672。
85）吉田東伍：増補大日本地名辞書，坂東，前掲，p. 194。
の一部も分割されたのではないかと考えられる。現在の長生郡の深谷の一部ではないかとも思うが、論定しない。今、長生都和陸山に香取伊豆乃御子神社があり、香取神社の裔社と考えられるから、碧河郷と下総の香取郡川崎郷との関係を重要視したくなるのである。このような状態からも推察される如く、関東から陸奥に入植する際の上陸地点として、常陸・下総との関係が深いので裔社の分布があるが、裔社のほかにも式内社の分布が多い。これについて、推論を拡大すると、対夷政策に大功のあった道嶋氏は、代々に亘り牡鹿郡の郡司級の家柄であり、且つ、一族撫って牡鹿連の姓を賜っている。このように崇功があったので、道嶋氏一族の氏神が官社に昇格し、道嶋氏が司祭となって、この地方の大氏族として活躍したものと考えられるから、式内社の分布が牡鹿には多くなかったのではないか。

9 式内社祭神からみた地域的様相

仙台平野を大別して仙北平野と仙南平野の式内社の分布をみると、前述のことであるが仙北の方が比較的多い。このことは、対夷政策を完遂させるために、国家的要請によりもと赤村の氏神であった村社が、官社になったものと推察し得る。それでは、それらの式内社の祭神の機能と地域との結合関係を探究したい。すなわち、祭神の機能は信仰者に信じられるから、信仰集団の機能を規定する。また、人は自己の信仰目的によって、信仰対象の祭神を選択する。従って、祭神により、それを祭祀する共同体、その祭祀共同体は古代わが国の場合、農業村落共同体と一致する場合があるが、その共同体自体の機能が規定される結果となる。

かかる観点から筆者は、式内社の祭神機能が、神社の守護使命となり、地域性形成の要因となったと考え、祭神から地域的様相を追究しようと調査を試みた。式内社祭神については『特選神名帳』および大塚德郎『式内の神々』を参照した。祭神を機能別に分類すると、大きく「山ノ神」「水ノ神」「石ノ神」およびその他の中央神に分けられる。その山・水・石の3神ともに、水田稲作の生産の神である。生産の神は結局、生活の神となり、生産の農稲は生活の安定に繋がる。従って、律令国家の漸移地帯に存在する村落において、その神に祈願することは、これ絶対、対夷の戦勝に通ずることにもなり、国家の祭礼組

86) 吉田東伍：増補 大日本地名辞書 興戎，前掲，p. 523.
87) 吉田東伍：増補 大日本地名辞書 興戎，前掲，p. 512.
89) 統日本紀 天平勝宝 5年（755）6月 8日，国史大系編修会編；統日本紀 前篇，1968，p. 218.
90) 内務省：特選神名帳，1925，蔵部甲陽協，p. 457～479.

— 25 —
織にその村の神社が編入されて、官社となったと考えてよい。
「水ノ神」はいまでもなく、水田稲作の神（農業神）であり、また水難から
の災害を防止、あるいは洪水から村落や民のる護神、山ノ神である。山ノ神
も「水ノ神」と同じ農業神といえる。河川の源は山であり、気象の変化も山に
激しく、山が荒れれば、洪水が起こると、当時信じていたので、水源の神とされ
ていた。従って、「山ノ神」の信仰範囲は下流流域に拡大している。このことは
後述しよう。祭神の機能別分類による式内社の郡別分布を表ににして掲げると，
第5表の如くである。その表によると、「山ノ神」は仙南に3、仙北に3社で

| 郡名 | 山ノ神 | 水ノ神 | 石ノ神 | 萩亜・香取神社の
|------|--------|--------|--------|その他中央神
| 白河 | 2      | 1      | 1      | 4
| 登津 | 3      | 1      | 1      | 3
| 萩城 | 1      | 1      | 1      | 1
| 標行 | 2      | 1      | 1      | 1
| 宇多 | 1      | 1      | 1      | 1
| 伊集田 | 1     | 1      | 1      | 1
| 巨田 | 1      | 1      | 1      | 1
| 柴取 | 1      | 1      | 1      | 1
| 宮城 | 1      | 1      | 1      | 1
| 鉄川 | 1      | 1      | 1      | 1

| 郡名 | 山ノ神 | 水ノ神 | 石ノ神 | 萩亜・香取神社の
|------|--------|--------|--------|その他中央神
| 自称 | 1      | 1      | 1      | 1
| 合計 | 24     | 21     | 10     | 10

92）柳田国男：氏神と氏子（定本 柳田国男集，第8巻，1963，渋摩書房） p.425〜426，水の神の
信仰
93）戸川安章・佐藤宗一・高橋富雄：東北の山岳信仰（伊東・高橋共編；古代の日本 8 巻，東北，1970，p.242〜259。
ノ神」が鎮座するの
は、やはり仙北平野
は低湿地が広範に分
布し、加えて河川が相
近接し、支流が樹
枝状態に発達し、洪
水常襲地を形成して
いるからであろう。

要するに、祭神の
機能と地域的課題と
には相関があるよう
に思われる。すなわ
ち、仙北平野は、洪
水防止が古代から現
在に至るまでの地域
的課題であるから、
「水ノ神」を祭神と
する神社が多く鎮座
する。仙北の場合、
「山ノ神」も「石ノ
神」も水に関係する
ものが多い。なお、
祭神の機能と地域的
課題の相関については
は、「石ノ神」の場合も考えられる。「石の神」は宮城郡以南の陸奥には分布
しない。黒川郡以北の陸奥に10社も鎮座する。仙北諸郡だけでも7社は存在
する。「石ノ神」というのは、「石」は母なる大地の造ったものであり、また、
永遠に不腐（不敗）のものであるという古代人の観念から、「塚神」として壇を
護り、内部の災厄を外に送り出し、外の災を内に入れないようにする「さえ」
の神なのであり、境界の神、辺境の神として信仰されるのである。仙北地帯は、

第10図 陸奥国における祭神の機能別分類による
式内社の郡別分布図

1. 山ノ神  2. 水ノ神  3. 石ノ神  4. 鹿島・香取神社
の裔社  5. その他中央神

94）関敬吾；石と俗信・和歌森太郎；日本の俗信（世界大百科事典，1968，平凡社）p.744。
柳田国男監修；民俗学辞典，1951，東京堂，p.22・23（石神），p.257・258（地蔵），p.400・
401（道祖神）。

柳田国男；石神問答（定本 柳田国男集，第12巻，1963，筑摩書房）p.19～161。
下中弥三郎編；神道大辞典，1巻，1970，臨川書店，p.94（石神）
律令国家の発展であるから、征夷大将の戦勝祈願のために信仰の対象となるのは当然のことであると考えてよい。

10 神社と生活地域の構造

律令国家の東北経営において重要なことは、開拓の進展である。しかし、東北日本の場合、前述した如く、対夷政策の処理があり、その処理が時には軍事的行動をともなうので、神威をかじりて完遂しようとして、古代人は神社に祈願したのである。従って、もともと農業神であった氏神が、征夷大将の国家的要請により、官社となった。そして、律令国家の漸移地域においては、その官社を中心にして征夷の戦勝祈願の基地の集落が形成されたのである。かくして、氏神が官社となった結果、内内社は村落共同体の守護神としての面と戦勝の神としての面との二重的性格をもつようになった。

さて、若干の事例を取挙げて考察してみよう。多賀城が立地する多賀城市松島丘陵南端部字市川の西に多賀神社が鎮座する。この神社は、明治42年（1909）に、奏社宮へ合祀された。この神社は、本来、農村の氏神であったが、延暦15年（796）に多賀神として從5位下を授けられているので、多賀城の守護神として国家的祭祀組織のなかにあったと考えてよい。今、多賀城創設時期を論じえないが、東北開拓の拠点として、陸奥鎮所という軍事的性格を備えるようになったのは、養老6年（722）以前である。それが神亀（724～728）に入ると拡大整備されて国府・鎮守府併設（府国並行）の機能を果した。そして多賀城の名称が、六国史上に現われるのは、宝亀11年（780）のことである。すなわち、正式に多賀城となってから、多賀城は叙位を受けていていることになるのである。なお、その祭神は伊能環尊であるから、完全な中央神であり、國家の守護神である。これほは所詮、多賀城が律令国家の中営政府を代表する律令国家漸移地域の前線基地であったからである。このほか陸奥では、名取と行方の両郡に多賀神社（前者は多加、後者は多河）が鎮座する。

多賀城の東方、七ヶ浜町花瀬浜天神堂の東に猿田彦尊を祭神とする鼻節神社

95）総日本紀 宝亀11年（780）12月27日，延暦元年（782）5月20日，国史大系編修会編；総日本紀，後篇，1968，p. 465，484。
96）山田安彦；東北日本における律令国家の漸移地域（前掲）
山田安彦；東北日本における歴史的トンネリア（川本・長井・宮川・渡辺共編；日本地誌ゼミナール，北海道と東北，1967，大明堂，所収）p. 276〜286。
97）日本後記 延暦15年（796）10月27日，国史大系編修会編；日本後記，1671，p. 6。
98）工藤雅樹；多賀城の起源とその性格，前掲，p. 85〜111。
99）総日本紀 宝亀11年3月22日，国史大系編修会編；総日本紀，後篇，1968，p. 459。
100）内務省；特選神名帳，前掲，p. 461。
101）内務省；特選神名帳，前掲，p. 460。
が鎮座する。この神社は海岸に臨むが、その海岸は険崖を形成する。現在のこの神社の孫子は、農民である。従って、この神社の祭神は農業神であったが、立地点が律令国家政府の征夷軍と律令国家側の入植者の上陸地点の目標にあたるため、海神の官社（名神大）となってものと推察される。

多賀城の西方、七北田川の中流、仙台市岩切の北、若宮前に鎮座していた志波彦神社（名神大）は、この流域の農業神であったが、色麻・玉造・伊治の各域柵への道路（志波道）への起点にあたるため、官社に昇格したものであろう。この神社は、明治7年（1874）12月に、岩切から塩竈神社へ遷座された。岩切の東北方、2.3 km の地点、利府町産野原に伊豆佐売神社が鎮座する。

第11図 陸奥国多賀城周辺の式内社の分布

さて、仙北地域の北西部、荒雄（江合）川上流の鳴子町大口字川渡に温泉石神社が鎮座する。この神社の祭神は、大名持命と少彦名命であり、御神体は自然石の大石で、山を信仰の対象としている。その上流 5.5 km の同じく右岸の鳴子町字湯元に温泉神社が鎮座する。この神社の祭神は、温泉石神社と同様に、大名持命と少彦名命であり、御神体は湯元の湯である。陸奥ではこの他、福島県浜通り南部、いわき市湯本大字湯本に温泉神社がある。因みに、延喜神社式の神名に温泉を冠した神社、およびそれに類する名称を接頭した神社名を摘出してみると、摂津１，河内１，近江１，伊勢１，尾張１，下野１，陸奥３，出羽２，因幡１，出雲１，伊予２社であり、全国で2,861社のうち僅かに14社に過ぎないのである。それらの温泉神社は、古来、大己貴命か少彦名命を祭神として奉祀しているが、風土記逸文・鎌倉実記３・詮日本紀14の古記載によると、

102）志賀剛；式内社の研究(2) 本論－式内社研究の諸問題，京都学芸大学学報，14号，1959，p. 38。
103）内務省；特選神名帳，前掲，p. 460。
104）内務省；特選神名帳，前掲，p. 463。
105）内務省；特選神名帳，前掲，p. 462。
これらの2神の国土開発の活躍の功績を称えるためである。また熱い霧泉に浸って心身の新たなる蘇生を期する。すなわち、人間労働の再生産の根本となる神として祀るようになった。古代人の神道な観念が、霧泉に対して霧妙なる神格を想定したのも不思議ではない。なお、荒雄川上流の鳴子付近は、仙北地方から出羽の新庄に通ずる北羽前のコースの要衝であり、また鬼首峠を経て出羽湯沢や雄勝に通ずるコースの要地でもあり、官社として昇格したものであろう。

鳴子よりさらに上流の荒雄川右岸、鬼首峠小向に荒雄河神社が鎮座する。その神社の祭神は瀬織津姫命であり、御神体は石であるといわれる。現地の古老達によると、信仰の対象は、その東方に聳える荒雄岳（984m）であり、口碑によると徳川時代中期頃まで、この山頂に荒雄川神社が鎮座したといわれる。この荒雄岳の東中腹に水源を発して、山麓を左廻り（地図上）に一周して東南流し、岩出山町から下流は江合川となる。この江合川中・下流域は洪水常襲地であったから、流域の岩出山・古川・荒雄・北浦・田尻・小牛田・涌谷・松山・鹿島台の諸地域集団は、その水源にあたる荒雄岳を御神体と仰ぎ、水難を回避するために、荒雄河神社に祈願した。従って、その信仰圏は広い。かかる状態は古くから続いていた。その証拠は、口碑・伝説によるとではなく、荒雄岳東南中腹、片山と荒湯の峠＝水神峠に、「水源の神」としての水神の陣が建立されている。その建立者は前述の江合川流域の諸地域の水利共同体である。それらの共同体に荒雄河神社の分神を36ヶ所に奉祀したという口碑がある。その

106）吉本敦：古代の湯けむり―熱湯信仰研究，国学院雑誌 66の2・3，1965，p. 36。  
107）内務省：特選神名帳，前掲，p. 463。  
108）現地調査の際，鳴子町の只野義男氏の御教示による。
第13図 玉造郡荒雄河神社の位置
5万分の1地形図鳴子図幅

36ヶ所の位置が、現在では具体的に不明であるが、荒雄河神社を別名「三十六所明神」と呼ぶ。三十六の分神を一社に合祀した三十六所明神は、現在、荒雄河神社とは別に陸羽東線の池月駅近くに鎮座する。この明神は、また式内社「荒雄河神社」という神社名でも呼称されている。

諏訪所、荒雄河神社の氏子圏は、荒雄(江合)川流域一帯に広がる。その圏内に、さらに各村落毎の氏神の氏子圏が存在するのである。

次に、仙北平野の北部、築館町域生野に推定される伊治城の北西方、三迫川の上流域域の栗駒町沼倉に鎮座する駒形根神社も、荒雄河神社と同様に、三迫川流域一帯と追川中流域にまで、その信仰圏が拡大していた。追川流域も洪水常襲地であり、その上流の三迫川の水源近くに、神社を勧請して水難回避を祈願したと考えられる。古代人は河川が荒れて洪水を起こすのは、水源の山が荒れるから信じていたので、山を神霊とした。このことは荒雄河神社も然りであり、駒形根神社も山を神霊としている。そのため、その氏子は河川下流一帯に拡大する。駒形根神社の社伝によると、当神社は栗原郡65村、陸中磐井郡40村、および羽後雄勝郡186村の総鎮守であったといわれる。現在もなお、30余村落(大字)の総氏神である。このことは氏子圏にも表徴されている。

これを要するに、かかる氏神の信仰圏があり、その広域的な信仰圏内に、局地的な小氏神の氏子圏が存在する。すなわち、大氏神の氏子圏内に、小氏神

109）内務省；特選神名帳，前掲，p. 471〜472。
の氏子囲が重層的に形成されている。このことは、既に六国史や風土記を検討
して別稿において論究しておいた。

結論 漸移地帯の地域的様相

奈良時代における東北日本の国家的漸移地帯は、太平洋斜面では仙台平野に
あたる。この平野は、南北に2大別され、南北それぞれに地域的特性がある。従って、歴史地理的的様相も、仙南と仙北とは類型化され、しかも、仙北は
漸移地帯でも边境の最前線的な様相が濃厚であり、常に蝦夷を意識して開拓が
進められている。仙北地域では、律令国家体制下に編成される集落の形成は稀
薄である。これは、仙北の自然的な条件に起因することもあるが、蝦夷との接
触が重要な要因でもある。従って神威を背景にして、対夷政策を進展させよう
として、元来、氏神であった農業神を官社に昇格させ、しかも、祭神に塞神を
奉祀する場合が多い。なお、対夷上、国家的要請により、氏神が官社になると、
農業神並びに守護神としての二面を備え、崇敬の範囲も広くなる。そして大氏
神の広域的な圏域と小氏神の局地的な圏域が重層的圏構造を構成する。かかる
構造が、古代地域においては、地域的秩序にも繋がることになる。律令国家の
漸移地帯であった仙北地域においては、そのような重層圏構造の地域構造が、
対夷政策上に地域の防備を固め、国家的開拓を前進させる基礎ともなったので
ある。

そのような、神社を中核とした圏構造の集落形成は、律令国家体制内の入植
者の集落だけでなく、蝦夷による司祭の神社で、しかも蝦夷の祖神を祀った氏
神が官社（式内社）となり、それを中核とした蝦夷の集落が形成された場合もあ
る。その例は少ないが、存在する。そのことは、古代東北を理解する上に、重
要な課題であり、今後も引続いて追究する積りである。その一部の究明につい
て、早くから喜田貞吉・中田薰によって試みられた。

そのうち若干明確になりつつある事例を掲げると、遙流志别（石）神社がそれ
である。その祭神は、遠流志別神である。このことについては、続日本紀皇亀
元年（715）10月の条に「陸奥蝦夷第三等邑良志別君字蘇弥奈等言、親族死亡子
孫数、常恐被2狄徒抄略1乎、請於2香河村1、造2部部家1、為2編戸民1」とあり、
邑良志別君の祖神を祀ったのが、遙流志別石神社ではないかと推論しうる。そ

110）真田貞吉；中田君のアイヌ語神名考を読む、史学雑誌 18の1、1907、p.48〜69。
111）中田薰；再び中田君のアイヌ語神名考に就いて、史学雑誌 18の6、1907、p.62〜88。
112）内務省；特選神名帳、前掲、p.472。
113）続日本紀；宝亀元年10月29日、国史大系編修会編；続日本紀 前篇、1968、p.64。

— 32 —
The Transitional Zone of the Ancient State in the Northwestern Japan

Yasuhiko YAMADA

At its extention to the North-eastern part of Japan, the Japanese Ancient State came into contact with the power of Ezo (a tribe in the ancient history of Japan). The author would like to call the region, where both powers met with, as the transitional zone of the Ritsuryo State or the State ruled by the Code. The purpose of this treatise is to analyse the regional structure at the transitional
zone, related to the Shinto shrine and the settlement.

Before the Ritsuryô State started to wield its authority to promote reclamation, the Yaoi culture, which was based on paddy farming in Western Japan, had already penetrated into the northern part of North-eastern Japan; the Kofun (the ancient tomb) culture, which originally had its central domain in Kinai provinces (Yamato, Yamashiro, Kawachi and Izumi), had propagated to the Sendai plain.

In examining the Kofun cultural sphere in the Sendai plain, it turned out that Takatsuka Kofun (the great tomb of ancient mould) culture had attained to the basins of the River Naruse and the River Eai. Its succeeding Gunshufun (ancient gathered tomb) culture had been at a standstill in the lower reaches of the River Abukuma. But the Yokoana-kofun (the tunnel tomb of ancient mould) culture had advanced to the basin of the River Hazama, which runs through the northern fringe of the Sempoku zone (northern half part of the Sendai plain). Some Yokoana-Kofun culture were still for a while to be seen in this zone even in the Nara Era.

The author has an intention to analyse the regional structure of the Sendai plain which located in the transitional zone of the Ritsuryô State, in following after the integrating process of the Ezo district into its organization. At the same time he would like to grasp the shifting aspects of regional structure at the Sendai plain from the Pre-Nara Era to the Nara Era at the angle of the authoritative penetration from the Ancient State's side.

Geographical feature of the Sempoku plain is its alternative range of hill and plain. At the plain there were found a lot of low and damp spots which infiltrated from the coast to the innermost of the land. At the places where are above more than 10 m. of contour line, their abrupt and sharp inclination often brought deluge to the low land at rainfalls. Thus there were supposed to be confirmed flood areas. Promotion of developing policy of the Ancient State had been greatly affected by this natural condition.

In consideration of village organization, now, it is to be pointed out that administrative villages, which were incorporated in the provincial system of the Ritsuryô State, were far more fully established in the Sen'nan zone (southern part of Sendai plain) than in the Sempoku zone.

In ancient times a Shinto shrine was usually built at each village, so it is natural to suppose that there should have been more Shinto shrines in the Sen'nan zone than in the Sempoku zone. On the contrary, in fact there were more of Shikinai shrines in the Sempoku zone than in the sen'nan zone, in taking note of the village organization ratio. To confirm the Shinto shrines of ancient times, it seems there is no other way but studying of the Shikinai Shinto shrines: i.e. the legalized ones in the Ancient Japanese Law "Engishiki". They had been usually set up around the forts at the frontiers or along the relaying route linking them with each other.
Most of Shikinai Shinto shrines were ordinarily located at the position above more than 10 m. contour line, facing down the low lying land or low marshy ground. Broad spread of Grey soil were to be found at such low plains. That is to say that their distributive aspect indicates that Shinto shrines were established at favourable places for paddy farming. Eventually, the inseparative interdependence of the Shikinai Shinto shrine to the paddy farming village makes the distributive sphere of the former accompany to the life circle of the latter.

Furthermore, on looking over the lineage of the Shikinai Shinto shrines, it comes to be possible to trace the immigrants' course. For instance, in case they were going to settle in Mutsu (the eastern part of the North-western Japan), they should have reached there by sea, from the southern part of Kanto (the Kanto plain of Japan), and when they directed to the Sempoku zone, they should have got to there by land from southern Mutsu, southern Kanto district and Tokai district (or southern central district of Japan).

At the Shikinai Shinto shrines there are worshipped 'spirit of water' or 'spirit of a riverhead', which deeply affect paddy farming. They are oftentimes deified as holy spirit of the shrine. Remarkably many Shinto shrines in the Sempoku zone enshrined such kind of 'spirit of water', for the reason that there had been confirmed flood zone since long before. Furthermore, on account of being the northern frontiers of the transitional zone for the Ritsuryo State, there also are great number of Shinto shrines which deified the 'spirit of stone' as emblem of the 'spirit of boundary'. This is the characteristic feature of the Sempoku zone. In another words, it is ascertained of the close correlation between the deified holy spirit and the regional problems.

Summing up, the daily circle of paddy farming village was organized in establishing the Shinto shrine as its nuclear existence. And the Shinto shrine that deifies 'holy spirit of a riverhead' as its community deity, had worshippers' sphere which extends to all over lower basins of the river, enlarging religious area in vast scale. Accordingly, there were circles of Ujiko or protegés of small tutelary deity at each separate village, establishing a small Shinto shrine as its center, in bosom of a stretched circle of Ujiko or the protegés of a great tutelary deity, pivoting on the great Shinto shrine as a great tutelary deity existence. Both of them made up the complex spherical construction.

Ezo villages in this district are also supposed to be taking after the village organizing form under the Ritsuryo State system, in embodying themselves in the style of the village, which established a Shinto shrine as its community core. Thus the Ezo tribe's peculiarity had been faded out in integrating into the system of the Ancient State.